

説話と教訓の伝承

——『伊曾保物語』『男、二女を持つ事』と『三国伝記』『二人のつまに、かみをぬかれし事』——

濱田 幸子

〔抄録〕

十六世紀後半、外国人宣教師によって伝えられたイソップ寓話集の和訳である『伊曾保物語』の下巻第十八話「男、二女を持つ事」は、我が国で作られた平仮名本『三国伝記』巻二の十五話「二人のつまに、かみをぬかれし事」に、人物構成・話の展開が酷似している。『三国伝記』の典拠からは、この話が仏典に端を発し、東方へ伝承し、中国の説話文学から日本の仏教説話集に取り込まれたことが見えてくる。一方『伊曾保物語』においては、

仏典に端を発したこの話が西方にも伝わり、イソップ寓話集に取り込まれた可能性も見られる。この説話の伝承過程では、二人の妻を持つ男の話には、ほとんど変化がないのに対して、付加される教訓は変化している。この点についても考察する。

キーワード 『伊曾保物語』『三国伝記』 説話 伝承 教訓

はじめに

『伊曾保物語』^①は、十六世紀後半、キリスト教布教・伝道を目的に来日した外国人宣教師によって伝えられたイソップ寓話集が和訳された書物である。その下巻第十八話「男、二女を持つ事」は、我が国で作られた平仮名本『三国伝記』巻二の十五話「二人のつまに、かみをぬかれし事」に、人物構成・話の展開が酷似している。

平仮名本『三国伝記』は、沙弥玄棟撰の説話集である版本『三国伝記』^②と同名の平仮名書き写本であるが、現在知られている唯一の伝本であり、版本『三国伝記』から抄出され草子風に改変された別種の作品である。^③先の話は、版本『三国伝記』の巻一第二十五話「拔髪男事 誹両端渡也」をもとにし、改変されて作られている。我が国で作られた希少本である平仮名本『三国伝記』と西欧由来の『伊曾保物語』に、酷似した話が存在するということは、驚くべきことである。これ

らの話の本を辿ることで、説話の伝承の実際を見ることが出来るのではないかと考える。

ところで、平仮名本『三国伝記』、版本『三国伝記』の両書の記述によると、この話は仏典にまで溯る。仏典に端を発したこの話は、東方へ伝承し、中国の説話文学から日本の仏教説話集に取り込まれて日本に伝えられ、さらに改変されて近世の草子に取り入れられたとみられる。

一方、『伊曾保物語』の翻訳原典は、先行研究によって、十五世紀後半に、それまでの西欧に流布していた各種のイソップ寓話集を集成しドイツで出版されたシュタインヘーベル本『イソップ』であるとされている。先の寓話は、シュタインヘーベル本『イソップ』のレミキウス抄第十六話「夫と二人の妻」の和訳であるが、どのように西欧に伝承し、「イソップ寓話集」の一話に取り込まれたのであろうか、可能なかぎり考察する。

また、『伊曾保物語』、シュタインヘーベル本『イソップ』、平仮名本『三国伝記』、版本『三国伝記』、に載るこの話は、人物構成・話の展開がほぼ同じであるのに、それに加えられた教訓は異なっている。

この点にも注目し、伝承における説話と教訓の関係についても考える。

一 『伊曾保物語』「男、二女を持つ事」と

『三国伝記』「二人のつまに、かみをぬかれし事」

『伊曾保物語』の下巻第十八話「男、二女を持つ事」の本文は次のとおりである。

ある男、二人、妻を持ちけり。一人は年長け、一人は若し。ある時、この男、老ひたる女の本もとに行く時、その女、申しけるは、「我、年長け齡衰よわいへて、若き男にかたらふ」など、人の嘲るべきも、恥づかしければ、御辺ごへんの鬢びんひげ、黒きを抜いて、白髪ばかりを残すべし」とて、忽ち黒きを抜いて、白きを残せり。この男、「あな憂うれし」と思へども、痛きをも顧かえりみず、抜かれにけり。

又ある時、若き女の本もとに行きけるに、この女申しけるは、「我、盛んなる者の身として、御辺のやうに白髪はくはつとならせ給ふ人を、夫とカタラひけるを、『世に男なきか』など、人の笑はんも恥づかしければ、御辺の鬢の白きを抜かん」といひて、これを悉く抜き捨つる。されば、この男、あなたに候へば抜かれ、こなたにては抜かれて、あづくには、鬢けがなふてぞ居たりける。

その如く、君子たらん者、故なき淫乱けがに汚けがれなば、忽ち、かゝる恥を請うくべし。しかのみならず、二人の機嫌はからを計ふは、苦しき常に深きものなり。かるがゆへに、諺に云く、「二人の君に仕へがたし」とや。

また、平仮名本『三国伝記』巻二の十五話「二人のつまに、かみをぬかれし事」の本文を次に示す。

むかし、一人の俗有。二人のつまを持たり。一人は老たり。一人は、いまた若き女にてそ有ける。男、老婦のもとへ行けるに、我、すてにとし老、しらかおひたり。なんちは、いまたさかんなれば、しらかすくなし。ならひ居たるてい、みくるし。我に心さ

し深くは、なんちのくろき髪をぬきて、しらかをのこし、我としきていに、なり給へ。扱こそ、ふうふならひ居たらんもよからめと、いひければ、男、もたしかたくて、くろき髪をぬき、しらかをのこしけり。扱、わかきつまのもとへ、いたりぬ。女、これをみて、我、いまた若し。なんちは、としおひ、しらかのみにて、くろきかみすくなし。ふうふと云て、ならひ居ん事、にけなく、みくるし。けに／＼、われをおもひ給は、そのしらかをぬきすて、わかき姿と成給へと、いひければ、男、とかく、いなみかたくして、しらかをこと／＼ぬきければ、くろきかみは、さきにぬきすてつ。かしらに、毛一すしもなくして見くるしき事、なに／＼たとへんかたなし。をんな、これをみて、あなあさましや、かゝる姿を、我男とは、たのむへきとて、おひ出しけり。男、せんかたなくして、かしらを、かくしつゝみて、らうふかもとへいたりぬ。老婦、これをみて、あなふしきや。なにとて、かしらをつゝみてとて、ほうしを、とりのけたれば、かしらにけもなく、はけたり。老婦、おそろきて、あら、おそろしやとて、にけきりにけり。この男、ふた心有し故に、かしらの髪を、ぬかるゝのみならず、二人のつまにきはれて、浅ましく成て、命をはりぬ。

この事、ひゆ経にとかれたり。是をみんな、はち、おそるへきこと也。

これら二つの話の展開は、老若二人の妻を持つ夫がそれぞれの妻にふさわしくあるためにと一方で黒髪を抜かれ、またもう一方で白髪を

抜かれ、ついには全く髪を無くしてしまうというもので、非常によく似ている。相違点は三点ある。第一に、男が抜かれたものが『伊曾保物語』では鬢びんげ、つまり髪と鬢であるのに対して、平仮名本『三国伝記』では髪だけである点である。第二に、『伊曾保物語』では、髪を抜くのが妻であるのに対して、平仮名本『三国伝記』では、妻に髪を抜くように勧められた夫が自ら抜くところである。第三は平仮名本『三国伝記』では髪が無くなつてしまつた男を見て、若い女は男を追ひ出し、老女は逃げ出している点である。つまりこの男が失つたものは髪だけでない。二人の妻も失い、さらには「二人のつまにきはれて、浅ましく成て、命をはりぬ。」とあるように、命までも失つたのである。それに対して『伊曾保物語』では鬢びんげを失つたことは書かれているが二人の妻が男のもとを去つたことは書かれていない。

ところで、『伊曾保物語』のこの寓話は、シュタインヘーベル本『イソップ』のレミキウス抄第十六話「夫と二人の妻」の和訳である。^⑤これを見ると、「彼の頭髮とひげから黒い毛ばかり引き抜いた。」と書かれ、『伊曾保物語』はそれを翻訳して鬢びんげとしていことが分かる。ここでは、夫の髪を抜いたのは妻である。また、寓話部分の末部も「かくて、この亭主は頭に毛が一本も無くなつてしまつた。」とあるだけで、この男が両婦を失つたとは書かれていない。上記の三点については『伊曾保物語』が翻訳原典に従っていることがわかる。

一方、平仮名本『三国伝記』は、それに先行する版本『三国伝記』をもとに成立しており、先に取り上げた話は、版本『三国伝記』巻一の第二十五話「拔髪男事 誹両端渡也」^⑥の前半部である。この話は

「梵日」で始まり、「梵語坊」の語る天竺（インド）の話である。

版本『三国伝記』では、男が抜かれたものは髪であり、抜いたのは男自身である。また、髪が無くなった男を小婦（若い妻）は嫌って追い出し、老婦は男の姿を見て逃げ去ってしまう。つまり、これら三点については、平仮名本『三国伝記』の内容は版本『三国伝記』に従っていることがわかる。『伊曾保物語』と平仮名本『三国伝記』との相違は、それぞれが本とした原典の相違であつたのである。但し、版本『三国伝記』では、男が命まで失うということはない。版本『三国伝記』には、さらにこの後に、二人の妻に逃げられた男が今度は、農耕をして世を渡ろうとするが、早が^{ひやう}続けば、山を下りて谷を耕し、洪水になれば谷から山に上り、徒に日を過ぐす話が載り、さらに、後世に犬となり、河の兩岸を行き来して餌を得ていたが、ある時相前後して兩岸から飯の煙がたつたため、どちらとも決めかね兩岸へ行き来を繰り返しようとう力尽きて流されてしまったという、優柔不断によって身を亡ぼす話が載っている。しかし、平仮名本『三国伝記』には農耕の話と犬になった話は載らず、「二人のつまにきはれて、浅ましく成て、命をはりぬ。」とだけ書かれている。どちらの妻にも嫌われまいとしたことで却って両方に嫌われることになってしまったことを浅ましく思つて男は死んでしまうのである。

さて、平仮名本『三国伝記』のこの話の末部には「この事、ひゆ經にとかれたり。」と書かれ、また版本『三国伝記』のこの話の末部にも「譬喩經・経律異相二見ヘタリ」と出典が示されている。⁽⁷⁾

その『経律異相』の巻第四十四には「有人為両婦所惡以至於死」と

題する話が載っており、版本『三国伝記』巻一第二十五話の全話から、後半部の一部が抜けた形で対応している。つまり、ここには、若老二人の妻を持つ夫が髪を失う話と、過去世で犬であつた時に河の兩岸の寺で食物を得ていたが、ある時二つの寺で同時に食事の鐘が鳴り、水に浮かびながらどちらに行こうかと迷い、とうとう溺れ死にしまった話が載っている。また、末部には「出十卷譬喩經」と記されている。

ところで、『経律異相』に出てくる話とまったく同じ話が『涅槃玄義發源機要』巻第四⁽¹⁰⁾の中にも出ている。⁽¹¹⁾そしてこの場合は『経律異相』とは違い一つの独立した話ではなく、教えを分かり易くするため引用である。ここでも、「譬喩經第三云。」とあり、この話が譬喩經からのものであることが示されている。

このように記述に従えばこの話は仏典にまで溯るのである。但し、今のところ、十卷譬喩經については『大正新修大藏經』にも見えず、その他の大藏經にも見えない。しかしながら、仏典に端を発したこの話は、東方へ伝承し、中国の説話文学から日本の仏教説話集に取り込まれて日本に伝えられたとみられる。

方や『伊曾保物語』に載る話は、シュタインヘーベル本『イソップ』のレミキウス抄に載る話の和訳であるが、どのように西欧に伝承し「イソップ寓話集」の一話に取り込まれたのであろうか。

『伊曾保物語』掲載の寓話と仏典、あるいは古代オリエント文学との関わりについてはいくつか先行研究がある。

【1】上田敏氏は「伊曾保物語考」の中で『イソップ』の寓話のいく

つかが印度起源である可能性を指摘している。¹²⁾

【2】小堀桂一郎氏は次のような指摘をしている。¹³⁾

『伊曾保物語』下巻三十二話「三人よき中の事」は、キリシタン版『サントスの御作業の内抜書』の第一巻第十五章「尊きこんへそれす・さん・ばるらあんとさん・じよざはつの御作業」の中に含まれた一寓話に類似した話である。また、『伊曾保物語』下巻三十一話「鳥、人に教下をする事」は、日本に伝わった『サントスの御作業の内抜書』には省略されているが、これに類似した話がヴァチカン文庫所蔵のマノエル・バレットの文書集中の「サントス御作業抄」には書写され伝わっている。この「尊きこんへそれす・さん・ばるらあんとさん・じよざはつの御作業」という話はキリスト教の聖者伝の一つであるが、「さん・ばるらあん」という導師がじよざはつ王子を教えに導くという大枠の話が釈迦の出家譚と非常に類似したものである。また、これら二つの寓話については、「三人よき中の事」は『衆経撰雜譬喻』下巻、三十三話や『雜阿含経』という仏典に原話に近い話を求めることが出来る。さらに「鳥、人に教下をする事」は『パンチャタントラ』の中にこれに近い話を見つけることができる。

またこれらの話の西方への伝承についての可能性も次のように指摘している。¹⁴⁾

紀元二世紀から三世紀にかけイラン高原を領していたパルチア王国には仏教が大いに栄え、数多くの訳経僧が輩出するまでになっていた。パルチア王国の東北に連なるバクトリア（大夏）には紀元前二世紀、匈奴に迫られた月氏が西遷し来たり紀元一世紀に

ヴェーマ・カドフィセスの治下に大いに栄えて西北インドに進出し、インダス河口までを支配下におさめていたが、やがて二世紀中葉クシャーナ王朝最大の王者たるカニシカ王（一四〇―一七〇頃）の出現に及んで中央アジア上空前の大王国を築き、東アジア大陸部と地中海を結ぶ連結地としてここを中心とするシルクロードを通じての東西文明の交渉は大いに進展した。その最盛期には王の版図はカスピ海にまで達し、従ってパルチアの仲介を経ずに直接ローマ帝国と交易ができた。カニシカ王は大規模な仏典結集で知られたる仏教の保護者であり、自らも仏教徒であったこの王の庇護の下に、馬鳴菩薩ことアシュヴァ・ゴーシャは仏教文学並びにインド文学史上にも不朽の名作とされる *Buddhacarita* 並びに著名ではないが重要な作 *Lalivastava* を著したのであった。前者は即ち曇無讖による漢訳の『仏所行讃』、後者は竺法護訳の『普曜経』である。（中略）

この西北インドの宗教的・社会的雰囲気は三世紀前半に起こった西隣のササン朝ペルシアにも必ずや浸透し影響を与えていたことと想像される。そしてその地でマニ教と接触する、というよりもマニという偉大な折衷派的預言者に摂取される。ところでインダス河流域からイラン高原にかけてのこの地方、今日で言えばアフガニスタン王国の一带にキリスト教の伝道師達が進出して来たのは五世紀よりは早からず、六世紀よりおそくはないとされる。要するに六世紀頃ネストリウス派の修道僧が東漸してこの地方に到達した時、彼等は自分達の教説を弘めるためにまず土着の宗教

たる仏教に就いての知識を持たざるを得なかった。従ってかつてアシシヴァ・ゴーシヤの活躍した土地であるクシャーナ王朝の故地にやってきていつしか仏伝に通曉する様なキリスト教の伝道師が少なからずいたとしても不思議ではない。殊にネストリウス派というのは唐代には遂に河南の地にまで及んで、そこで唐の国情に合わせて自己本来の教理を歪曲してまで教説の宣布に努めたという異端的な一派である。この所謂景教のあり方から推してみても、仏陀伝を採ってキリスト教の聖者に仕立て直し、以て伝道の一資ともしようと試みた伝道師が居たとしても特に怪しむに足らぬことである。

一言にして言えば仏陀伝のキリスト教的脚色であるバルラームとヨサファトの物語は、こうして六・七世紀の頃に中央アジアの何処かの地で、ネストリウス派の一伝道師の筆によって編述されたものではあるまいか。

【3】遠田勝氏は『イソップ寓話集』中の「イソップ伝」がオリエント起源であることを次のように述べている。¹⁵⁾

1 『イソップ伝』に見られるミューズやイシスの神に対する純朴さ、敬虔さ。

2 『イソップ伝』を含むパピルス断片がアレキサンドリア近郊及びナイル川沿岸で発見されている。

3 物語中エジプト王がファラオではなく国内のみで知られているネクタボという名称でよばれている。

4 イソップのパビロニアとエジプトにおける話は、古代オリエントで

愛好された『賢者アヒカル物語』に由来している。

その『アヒカル物語』は、エジプトのナイル河上流のエレバンティネ島で発掘された前五、六世紀のものと推定される古代アラム語のパピルスの中に物語の断片が含まれている。「イソップ伝」成立については、次のように述べられている。

『アヒカル物語』が前五、六世紀まで辿れるようになるとギリシャ語世界への波動という問題も真剣に討議されるようになった。ディオゲネス・ラーエルティウスの『哲人伝』が伝えるところによればテオフラストスは『アヒカルの書』というものを著していたらしい。これがアヒカル自身の物語なのか箴言寓話の集成なのかは『アヒカルの書』自体が伝存しないために不明なのだが、『アヒカル物語』の一部もしくは全部が早くも前四、五世紀にはギリシャ語世界に伝えられていた一つの証拠とはなる。誰が伝えたのかという問題に関しては異説があり、ペリー教授はデモクリトスに仮託された箴言にアヒカル箴言が混入している事実をもつてデモクリトスが翻訳した可能性を示唆し、もう一人の著名なイソップ寓話研究者であるハウスラートは後に述べる「アヒカルとイソップ」という論文でテオフラストスの弟子の一人にデメトリウス・パレロスがいる。デメトリウスは、これもやはり『哲人伝』によれば前二〇〇年頃に最初のイソップ寓話集を編纂したとされる人物である。とすればここからイソップ寓話にアヒカル寓話が混入した可能性は十分想定できる。

「男、二女を持つ事」の翻訳原典シュタインヘーベル本『イソップ』の「夫と二人の妻」はレミキウス抄に入っている話であるが、「イソップ伝」もレミキウスによって伝えられている。そのことから「夫と二人の妻」の成立が古く、仏典成立後のそれに近い時期に西に伝えられたと考えるのは早計であるが、その可能性はあると考えてもよいのではないだろうか。

二 教訓の伝承

ところで、『伊曾保物語』、シュタインヘーベル本『イソップ』、平仮名本『三国伝記』、版本『三国伝記』、『経律異相』『涅槃玄義發源機要』に載るこの話は、人物構成・話の展開がほぼ同じであるのに、それに加えられた教訓は異なっている。この点に注目し、伝承における説話と教訓の関係について考えてみる。

「男、二女を持つ事」類対比表」に示したように、説話のモチーフは男と老若二人の妻の話で、全て同じである。

教訓についてみると、『経律異相』『涅槃玄義發源機要』には教訓部分はなく、『伊曾保物語』、シュタインヘーベル本『イソップ』、平仮名本『三国伝記』、版本『三国伝記』ではそれぞれに付された教訓が異なる。

シュタインヘーベル本『イソップ』では「女ほど男にとつて悪いものはない」「たえず悪妻に悩まされているよりは、やもめでいるほうがずっといい。彼女は安息の時間を苦痛の時間に変えてしまうからである。」と女性に対する非難となっている。しかしこれは、男の側か

らみれば女色の戒めである。『イソップ』では、養子に与えた教訓にも「妻に秘密を明かすな」や「妻には優しく話せ、彼女が他の男を求めないように。なぜなら女は非常に移り気であり、妻は夫におだてられたり優しい言葉を掛けられたりすれば浮気をしたくなるからである。」という言葉があり、妻、女性を全く信じていないところが見られる。

しかし、その和訳である『伊曾保物語』では「故なき淫乱に汚れないば、忽ち、かゝる恥を請くべし。」となっている。ここには女性に対する非難はない。この教訓は男に対する非難であり、その意味では女色の戒めである。ここまでは『イソップ』の寓意を移したものと言つてよいだろう。しかしその後続く「しかのみならず、二人の機嫌を計ふは、苦しみ常に深きものなり。かるがゆへに、諺に云く、「二人の君に仕へがたし」とや。」は二心を持つことへの戒めであつて『イソップ』には見られないものである。

一方、平仮名本『三国伝記』では、「この男、ふた心有し故に、かしらの髪を、ぬかるゝのみならず、二人のつまにきはれて、浅ましく成て、命をはりぬ。この事、ひゆ経にとかれたり。是をみんな、はち、おそるへきこと也。」と二心を持つことを戒めている。『伊曾保物語』に見られる「二心の戒め」という教訓は平仮名本『三国伝記』の教訓と共通するのである。

ところが、平仮名本『三国伝記』が、その作成に依拠した版本『三国伝記』では「心多キ者ハ今世後世共ニ叶ヌ事也。」となつていて心（氣）が多いことを戒めている。「心（氣）が多い」というのは、同時

「男、二女を持つ事」類話対比表

書名	説話のモチーフ	両婦と同居 か別居か	妻のもとへ 行く順	髪を抜いたのは	教訓
A『伊曾保物語』	①男と二人の妻の話	別居	老女↓若女	妻(老女、若女)	その如く、君子たらん者、故なき淫乱に汚れなば、忽ち、かゝる恥を請くべし。しかのみならず、二人の機嫌を計ふは、苦しみ常に深きものなり。かるがゆへに、諺に云く、「二人の君に仕へがたし」とや。 女色の戒め 二心あることの戒め
B『イソップ寓話集』 (シュタイン ヘーベル本 『イソップ』)	①男と二人の妻の話	同居	老女↓若女	妻(老女、若女)	女ほど男にとつて悪いものはない、…… それゆえ、年を取つた男には再婚など愚の骨頂である。たえず悪妻に悩まされているよりは、やもめでいるほうがずっといい。彼女は安息の時間を苦痛の時間に変えてしまうからである。 女ほど男にとつて悪いものはない(↓女色の戒め)
C平仮名本 『三国伝記』	①男と二人の妻の話	別居	老女↓若女	男(両婦に勧められ自分で)	この男、ふた心有し故に、かしらの髪をぬかるゝのみならず、二人のつまにきはれて、浅ましく成りて、命をはりぬ。 この事、ひゆ経にとかれたり。是をみんな、はち、おそるへきこと也。 二心あることの戒め
D版本『三 国伝記』	①男と二人の妻の話 ②田を耕作し、徒に峯 と谷を上り下りした話 ③後世に犬となり、徒 に河の兩岸を行き来し ておぼれ死にした話	別居	老女↓若女	男(両婦に髪を抜くように勧められ、自分で)	心多き者ハ今世後世共二叶ヌ事也。 心多きことの戒め (二心あることの戒め)
E『経律異 相』 『涅槃玄義 發源機要』	①男と二人の妻の話 ③過去世に犬であつた 時、徒に河の兩岸を行 き来しておぼれ死にし た話	別居	若女↓老女	男(若婦に老いたので老婦の ところに行くように言われて は、自発的に白髪を抜き、老 婦に私はもう老いて髪が白 いと言われては自発的に黒髪を 抜き、それをくり返した。)	(なし)

に多くのことを気にかけることであつて、「二心」とは意味が異なる。版本『三国伝記』では、①「男と二人の妻の話」の他に②「田を耕作し、徒に峯と谷を上り下りした話」③「後世に犬となり、徒に河の兩岸を行き来しておぼれ死にした話」が合わせて載せられ、これら三つの話を括る教訓として「心（氣）が多いことを戒め」ているのである。「心（氣）が多い」とは一つの事をしているも他の事が気になり一つの事に集中できず、どっちつかずで何も得ることができないことをいう。②では農業で身を立てようと思ひ立つが、雨期には洪水を憂えて山に上つて耕作するが、すぐに水がなくなる。今度は水を求めて谷に下りて耕作するが、今度は洪水で作物を流された山に上るということをくり返し、どっちつかずで何も得られない。③では河の東岸の煙を見て、餌を求めて泳いで行くが、まだそこで食べる事が出来ていないのに、河の西岸で煙があがると今度はそちらへ泳いでいく、これをくり返してとうとう力尽きて死んでしまったという話である。一方で餌を求めれば食べることができたであろうに、一つに決められず、一方にいと他方が気になり、他方にいるともう一方が気になり結局行ったり来たりするだけでどっちつかずで何も得られないのである。①では老若二人の妻を持つ夫が妻に氣に入られようと思ひ、老いた妻のもとでは言われるままに黒い髪を抜き、若い妻のもとでは言われるままに白髪を抜き、その裸頭を嫌われて、若い妻には追い出され、老いた妻には逃げられるのである。これも、老若どちらかひとりを妻にしていれば、妻に逃げられるようなことはなかったであろう。どっちつかずで妻を両方とも失うのである。

しかし、①の話は、老若二人の妻の両方とも得ようとしたためにどちらも得られなかったという「二心を持ったために失敗した」話ともいえる。両方得ようと思つた、つまり欲張つたためにどちらも得ることができなかったのである。平仮名本『三国伝記』では「二心を持つことを戒め」た話として版本『三国伝記』から、①「男と二人の妻の話」だけをぬきだしているのではないだろうか。

ところで、平仮名本『三国伝記』と『伊曾保物語』の教訓に共通して「二心を持つことを戒め」ることがあるのは、偶然であろうか。『伊曾保物語』が和訳され、現在見られる形に作られるときに、この話が版本『三国伝記』の影響を受けたということは考えられないだろうか。また逆に、版本『三国伝記』から平仮名本『三国伝記』が作られるときに『伊曾保物語』の影響を受けたということは考えられないだろうか。

『伊曾保物語』は、慶長・元和年間版から寛永十六（一六三九）年刊本まで九種の古活字本が出、その後万治二（一六五九）年刊の挿絵入り整版本も出ている。その間の本文の異同はほとんどなく、『伊曾保物語』の成立は慶長・元和年間（一五九六～一六二三年）より以前と考えられる。そうすると、その頃にはまだ版本『三国伝記』の出版普及はなく、『伊曾保物語』への影響は考えられない。それでは、『伊曾保物語』に、原典にはない教訓「二心を持つことへの戒め」が付加されたのはどうしてだろうか。

実は『伊曾保物語』には、原典にはない教訓の付加が随所に見られる。一話全てが教訓で出来ている中巻第一話「イソポ、子息に異見の

条々」には「君に二心なく、忠節を尽くす儘に命を惜しまず、真心に仕へ奉るべし。」とあるが、この教訓も原典には見られない。これは、「イソップ寓話集」が翻訳され『伊曾保物語』が作成されるときに教訓の日本化的変容といつてよい。¹⁹⁾ このように『伊曾保物語』は独自に日本的な教訓として、「二心を持つことの戒め」が付加されたと考えられるのである。

それでは、版本『三国伝記』から平仮名本『三国伝記』が作られるときに『伊曾保物語』の影響を受けたのではないかという点についてはどうであろうか。

この平仮名本『三国伝記』は転写本と見られ、書写年次も寛永(一六二四〜一六四三)年間からそれ程下らない時期と推定されており、成立はさらに、それより以前と考えられる。その時期には、古活字本の『伊曾保物語』は刊行されており、平仮名本『三国伝記』の編者が『伊曾保物語』を見ていた可能性は否定できない。

しかしながら、平仮名本『三国伝記』には、『伊曾保物語』が直接引用されたと思われる箇所は見られない。また、「二心を持つことを戒める」表現も、『伊曾保物語』では「二人の機嫌を計ふは、苦しみ常に深きものなり。」²⁰⁾「二人の君に仕へがたし」と二人に対して良い対応をする(良い顔をする)ことは苦しみが常に深い、そんなことは出来ない(してはいけない)と直接的である。それに対して、平仮名本『三国伝記』では「ふた心有し故に、かしの髪を、ぬかるゝのみならず、二人のつまにきはれて、浅ましく成て、命をはりぬ。」と、二心を持ったために(二人に対して良い顔をしようとしたために)、

二人にきらわれ、命を落とした。だから、二心など持たない方がよい(持つてはいけない)、と逆説的である。これらの点から、版本『三国伝記』から平仮名本『三国伝記』が作られるときに『伊曾保物語』の影響を受けたとは考え難いのである。

おわりに

十六世紀後半、キリスト教布教・伝道を目的に来日した外国人宣教師によって伝えられたイソップ寓話集が和訳された書物である『伊曾保物語』の下巻第十八話「男、二女を持つ事」が我が国で作られた平仮名本『三国伝記』巻二の十五話「二人のつまに、かみをぬかれし事」に、人物構成・話の展開が酷似していることから、これらの説話の伝承を溯つてみた。その結果、『三国伝記』では、この話が仏典に端を発し、東方へ伝承し、中国の説話文学から日本の仏教説話集に取り込まれて日本に伝えられたことが見えてきた。一方『伊曾保物語』のこの寓話については、仏典に端を発したこの話が、一方で西方にも伝わりイソップ寓話集にも取り込まれたのではないかという可能性も見られた。

譬喩經によると紹介されたこの話は、中国の『経律異相』『涅槃玄義發源機要』においては、その男の話だけではなく、過去世で犬であった時も気が多いために何も得られなかった話も付随しており、教訓は付けられていなかった。それが日本に伝わり、版本『三国伝記』に採られる過程の中で、男の話の後日譚が加わり、犬の話は過去世のことではなく、男が心が多く一つに心が定まらないまま一生を暮らした

報いとして畜生に生まれ変わった時の話として「畜生ノ報ヲ受テ大ト成ル。」と書かれるのである。また「心多キ者ハ今世後世共ニ叶ヌ事也。」という教訓も加わる。さらに版本『三国伝記』に基づいて作られた平仮名本『三国伝記』では、三話から出来ていた話が二人の妻を持つ男の話だけに減らされ、この話だけに対応する「女色の戒め」と「一心の戒め」という教訓が付されるのである。

このように、説話の伝承について見ると、「男、二女を持つ事」の一例ではあるが、説話が伝承される中では、類似したテーマの話が付加されることもあるが、人物構成・話の展開はほぼ同じであった。それに対して、説話に付加された教訓は変化していた。このことは、説話が伝承するとき、まずは話そのものが伝承し、それに付加される教訓は、その話をどう受け止めるかによって変化するといえるのではないだろうか。つまり、その国や地方、また伝わった時代の生活習慣等様々な影響を受けて、教訓は変化し得るといえるのではないだろうか。このことについては、さらに多くの説話の伝承を見ていきたい。

〔注〕

(1) キリスト教布教・伝道を目的に来日した宣教師によって伝えられ、日本語に翻訳された「イソップ寓話集」には二種ある。一つは、ローマ字口語体で書かれた『イソポのハブラス』、いま一つは国字文語体で書かれた『伊曾保物語』である。『イソポのハブラス』は『天草本伊曾保物語』とも呼ばれるが、本稿で取り上げているのは国字文語体で書かれた『伊曾保物語』である。なお『イソポのハブラス』には「男、二女を持つ事」は掲載されていない。また、本稿で使用した本文は『万治絵入本伊曾保物語』(二〇〇〇年、武藤禎夫校注、

岩波文庫)である。

(2) 応永末(一四二八)年から正長・永享・嘉吉(一四二八～一四四四年)の頃までに成立。沙弥玄棟撰の説話集。和漢混淆文体。現存する『三国伝記』は寛永十四(一六三七)年刊の整版本と、同一の版本を用いた版本二種と写本が一種である。平仮名で書かれた『三国伝記』とまぎらわしいので、平仮名で書かれた『三国伝記』を平仮名本『三国伝記』、この書を版本『三国伝記』と呼ぶことにする。

版本『三国伝記』は、序に、東山の清水寺に参詣した天竺の僧梵語坊、大明の俗漢字郎、本朝の遁世者和阿弥の三人が慰巡の物語に及んだことが語られ、巻一の一話から、梵、漢、和の順にそれぞれの人物によってそれぞれの国の話が語られるという形式をもった説話集である。

(3) 平仮名本『三国伝記』は、写本で編者、成立年未詳。本文は『三国伝記』(平仮名本)(一九八二年、安藤直太郎監修 名古屋三国伝記研究会編 古典文庫)による。安藤直太郎氏所蔵のこの本は、渡邊信和氏の解説によると、転写本と見られ、書写年次は近世初期、寛永年間からそれ程下らない時期と推定されている(『三国伝記』(平仮名本)下)の解説)。さらに、次のように述べられている。

本書は、外題・内題ともに「三国伝記」となっているが、沙弥玄棟撰の説話集「三国伝記」の単なる平仮名書き写本ではなく、それから抄出され、草子風に改変された別種の作品とみなされる。

(中略) 編者はいくつかの典拠となり得るような作品を手元に置き、自由に閲覧しながら、しかも説解上の誤りなどで文意が通じなくとも恣意的に文をかえてしまうこともなく自分の選んだ典拠に忠実な態度で平仮名本を編んだということになる。(中略) ともあれ平仮名本は、中世後半からの文学の流れ、説話文学から中世短篇小説、お伽草子へ、さらに近世の草子類へといった発展の過程を示す作品であると言える。

(4) 当時は男性は^{さかやみ}髪代を剃っていたのでここでは頭髮と鬚のことをあわせて鬚鬚^{さかやみ}といっていると考えてよいだろう。

(5) 『イソップ寓話集』(一九九五年『キャクストン版イソップ』伊藤正義訳、岩波ブックサービセンター)レミキウス抄 第十六話 夫と二人の妻。なお、『キャクストン版イソップ』はシュタインヘーベル本『イソップ』の英訳本である。本文は以下のとおり。

女ほど男にとって悪いものはない、次の寓話で明らかになるように。中年の男が二人の妻を娶った。つまり、年老いた女と若い女で、二人とも彼の家に住んでいた。さて、年老いた妻は夫の愛を得たがために、彼が自分にいつそう似るようになって、彼の頭髮とひげから黒い毛ばかり引き抜いた。一方、若い妻は、彼がより若く陽気で美男子に見えるようにと、しらがを全部引き抜いた。かくて、この亭主は頭に毛が一本も無くなってしまった。

それゆえ、年を取った男には再婚など愚の骨頂である。たえず悪妻に悩まされているよりは、やもめでいるほうがずっといい。彼女は安息の時間を苦痛の時間に変えてしまうからである。

(6) 版本『三国伝記』(『三国伝記』(上)池上海一校注 三弥井書店 一九七六年) 卷一 第二十五話 抜髪男事 誹面端渡也。本文は以下のとおり。

梵曰、昔、一人ノ俗アリ。年半過テ白髪生ヒ交レリ。是ニ二人ノ妻有リ。独ハ夫ヨリ老タリ。独リハ遙ニ若カリケリ。

此ノ男老婦ガ許ニ行タルニ、婦曰ク、「我ハ年老齡傾テ首ニ雪ヲ戴キ、汝ハ未ダ盛シナレバ石流白髪少シ。吾ヲ妻トセント思ハバ汝ガ黒キ髪ヲ抜捨テ吾ト同ク友白髪ナラシメヨ。サテコソ双ビタランモ宜シカラメ」ト曰フ。夫ト志シ有リケレバ妻ガ詞ニ随テ黒髪ヲ抜テ白ガヲ残セリ。又若妻ノ許ニ行タレバ「吾年若シ。雲ノ鬢未ダ變。汝ハサナガラ霜雪ヲ残シテ黒キ髪ナシ。妻男ト曰ンモ人目モ見苦。吾ニ志ヲ思ハバ白髪ヲ抜テ若キ姿ニ令成」ト曰フ。夫ト是モイナミ難ク寛テ又白髪ヲ抜捨テ白粉ヲ面ニヌリ青黛ヲ眉ニ画ケリ。去程ニ黒キ髪ハ先キニ抜、白髪ハ今抜捨テ見ルニカシカリケリ。小婦嫌テ曰、「世ノ中ニカカル事ハ未ダ見。何ノ姿ゾヤ。カカラン者ヲバ如何カ男ニモ可レ憑」ト曰テ追出ケレバ、無シ

方^カ頭ヲ裏顔ヲ指隠テ老婦ガ許ニ行ヌ。婦ガ曰、「何^{コト}ト」頭ヲ裏ミ顔ヲバ隠^カゾ」トテ引ノケ見レバ、裸^{ハダカ}頭彩^{イロド}色^{イロ}顔^カ、許由^{ヨリ}捨^ステ顔淵^{ゲンエン}〔用^{ヒシ}ヒシ〕器^{モノ}に絵^エを書タルニ相似タリ。老婦驚テ、「穴^{アナ}見苦シ、畏^{オソ}シヤ」トテ逃去リヌ。

兩婦ニ嫌レ吾モ人目恥^ハサニ窓ノ前ニ泣居タリケルガ、何ニシテ世ヲ渡ント思フ程ニ、養^{マサ}命^メヲ稔^シ身^ミ莫^ナ太^タニナルハ於^ニ三農^{サンノウ}ニ立^タテ高^{タカ}キ岳^{ツク}ニハ炎^{エン}早^{ハヤ}ノ憂^{ウレ}アリ、深^{フカ}キ谷^コニハ洪水^{フウスイ}ノ難^ナ有^{アル}ト計^{ハカ}ラヒ、旬^{ジュン}ノ雨^{アメ}時^{トキ}には下^シル山^{ヤマ}に昇^{ノボ}リ田地^{チノチ}ヲ開^ヒキ、日^{ヒト}モ四^ヨ五^ゴ日^{ニチ}過^スレバ水^{ミヅ}ノ潤^{うる}無^ナ。谷^コニ下^シテ水^{ミヅ}ノ便^{べん}リ在所^{スオ}ヲ作^スレバ、日^{ヒト}来^キ久^クク早^{ハヤ}リヌル後^{ノチ}霖^{リン}雨^{アメ}旬^{ジュン}ヲ渡^{ワタ}テ、洪水^{フウスイ}谷^コニ満^ミテ跡^{アト}形^{ガタ}ナク流^ナレヌレバ、力^{チカラ}ヲ尽^{ツク}シテ疲^{つか}伏^ふシ、加^か様^{よう}ニ雨^{アメ}降^フバ峯^{ミネ}ニ登^{ノボ}リ日照^{ニチサウ}バ谷^コニ下^シリテ、徒^{タラ}ニ春^{ハル}過^スギ夏^{ナツ}闌^{ラン}ヌ。

角^{ツノ}テ生涯^{シヤイ}暮^スヌレバ、畜^{ウシ}生^シノ報^{ホウ}ヲ受^{ウケ}テ犬^{イヌ}ト成^ナル。犬^{イヌ}ト生^ナテモ心一^{イツ}筋^{キン}ナラズ。習^{ナリ}因^{イン}〔猶^{ナホ}〕残^{ノコ}レリ。一^{イツ}ノ大^{オホ}河^カヲ隔^ヘテ東^{ヒガシ}西^セニ人^{ヒト}里有^{アル}処^{トコロ}ニシモ生^ナレテ、朝^{アサ}ノ煙^{ケムリ}リ東^{ヒガシ}ノ里^{サト}ニ立^タツ時^{トキ}ハ廻^{マワ}リ此^{ココ}ノ河^カヲ游^ユテ東^{ヒガシ}ニ至^{ツキ}ル。烟^{ケムリ}ハ立^タ共^ニ其^{ソノ}食^シ未^マダ出^デ来^キ間^マ又^{マタ}西^セノ里^{サト}ニ煙^{ケムリ}立^タコトアレバ、サリトモト思^{オモ}テ又^{マタ}河^カヲ游^ユテ西^セニ着^{ツキ}。其^{ソノ}未^マダ出^デ来^キ。東^{ヒガシ}ニ渡^{ワタ}リ西^セニ行^{ユク}程^{ハカリ}ニ、河^カノ中^{ナカ}ニ力^{チカラ}尽^{ツク}テ空^{カラ}ク流^ナレ失^{ナク}ニケリ。

如^スク此^{コノ}心^{ココロ}多^{オホ}キ者^{モノ}ハ今^{イマ}世^セ後^{ノチ}世^セ共^ニ二^ニ叶^{ツキ}ヌ事^{コト}也^{ナリ}。譬^{タトヘ}喻^ユ經^{キヤウ}・経^{キヤウ}律^{リツ}異^イ相^{サウ}ニ見^ミヘタリ。

(7) 『三国伝記』(上)池上海一校注 三弥井書店 一九七六年) 卷一の第二十五話の頭注及び補注には「このような注記にもかかわらず、本話が『経律異相』に直接依拠したものと考えるがたい。」と書かれており、その根拠として、『異相』の話がこの話の第三段の農耕の条を欠く点と、第二段で男が妻を訪れるのが小婦・大婦の順でこの本話と逆になっている点を挙げている。さらに版本『三国伝記』で男が二人の妻に対して両方の気持ちを得ようとしてどちらからも嫌われ、農耕に対してもどっちつかずで徒に日を過ごしたために畜生の報いを受けて犬となったとしているのに対して、『経律異相』ではこの男の過去世(前世)が犬であったとしている点も相違している。

これらの点から、版本『三国伝記』が『経律異相』に直接依拠したとは言えないだろう。しかし版本『三国伝記』の本文中に書名が明示されているということは、この話が『譬喻経』と『経律異相』に載る話を踏まえて書かれていたとは見てもよいであろう。

(8) 中国、梁の天監十五(五一六)年撰。

(9) 『大正新修大蔵経』五十三卷。本文は次のとおり。

昔有一人於兩業。有二婦適詣小婦。小婦語言。我年少。婿年老。我不染住。可往大婦處作居。其婿拔去白髮。適至大婦處。大婦語言。我年老頭已白。婿頭黑宜去。於是拔黑作白。如是不止。頭遂秃尽。二婦惡之。便各捨去。坐愁致死。過去世時作寺中狗。水東一寺水西一寺。聞捷槌鳴狗便往得食。後日二寺同時鳴聲。狗浮水欲渡。適欲至西復恐東寺食好。向東復恐西寺食好。如是猶予溺死水中。出十卷 譬喻経

(10) 『涅槃玄義發源機要』卷第四の初めには「宋錢塘沙門釋智圓述」と記述されている。

(11) 『大正新修大蔵経』三十八卷。本文は以下のとおり。傍線は稿者による。

……法障者。欲聞此経法義竟不獲聞。由前八事為障也。一逢師出谷障。二參請交絡障。三金陵土崩障。四復屬度劉障。五仍遭霧露障。六滯疾予章障。七東旋台嶺障。八冬逢入滅障。由具八事障我聞法。故曰法障。若不出合則合得聞。雖在帝庭。若參請事簡則合得聞。雖其人交絡。若金陵久安亦當得聞。乃至若不入滅雖有前障。終當講演令我得聞。故入滅之障最為深重故下嘆云。日既隱於重崖。盲龜眠於海底也。奚可勝言者。奚何也。勝平声謂法障之多非言所載也。二昔五下引事感傷。初引事類已。賢愚經第六云。毘舍離國有五百盲人。乞匄自治。時聞人言。如來出世。盲人聞已還共議曰。我曹若當遇仏必見救濟。即便問人仏在何國。答云。仏在舍衛。遂各乞金錢一枚。僱人引往。時有一人收取金錢。將諸盲人至摩竭提國。棄諸沢中。盲不知處。互相捉手。經行他田傷破苗穀。長者行田見彼踐苗。甚多瞋怒。盲者求哀具宣上事。長者使人將詣舍衛。

適達彼國。又聞仏往摩竭提國。及到彼國。復聞世尊已還舍衛。如是追逐凡往七反。仏知根熟乃於舍衛待之。盲到仏所。蒙光目開。仏為說法成阿羅漢。祇洹等者。譬喻經第三云。昔有一人作兩業。有二婦適詣小婦。小婦語言。我年少婿年老。我不染住。可往大婦處作居。其婿拔去白髮。適至大婦處。大婦語言。我老頭已白。婿頭黑宜去。於是拔黑作白。如是不止。頭遂秃尽。二婦惡之。便各捨去。坐愁致死。過去世時作寺中狗。水東一寺水西一寺。聞捷槌鳴狗便往得食。後日二寺同時鳴聲。狗浮水欲渡。適欲至西。復恐東寺食好。向東復恐西寺食好。如是猶予溺死水中。文云祇洹者。通取寺名。非直指祇洹寺也。唯彊唯沈無見無得者。結前二事。盲雖七追唯至於他彊。竟不見仏故。云唯彊無見。狗聽兩鐘唯死於沈溺。竟不得食故云唯沈無得。……

(12) 上田敏「伊曾保物語考」(『定本上田敏全集 第九卷』教育出版センター 一九八五年。明治四十三年十一月二十七日、京都市岡崎の府立圖書館樓上にて史学研究会第三回總會の席上行われた講演。後『史学研究会講演集第四冊』(明治四十五・四)に収められた。)

(13) 小堀桂一郎「三人の友の話——古活字本『伊曾保物語』下巻第三十三話と「エヴリマン」説話——」(『比較文学研究』三十卷、一九七六年九月)。

小堀桂一郎「エヴリマン」説話の根源と伝承——「三人の友の話」補説(『比較文学研究』三十四卷、一九七八年、十二月)。

小堀桂一郎「小鳥の唄」の発祥(『比較文学研究』六十五卷、一九九四年、七月)。

(14) 小堀桂一郎「三人の友の話——古活字本『伊曾保物語』下巻第三十三話と「エヴリマン」説話——」(『比較文学研究』三十卷、一九七六年九月)。旧漢字旧仮名づかいは稿者が現行のものに改めた。

(15) 遠田勝「イソップ伝」の伝承と変容——『アヒカル物語』から『伊曾保物語』まで——(『比較文学研究』四十四卷、一九八三年十月)。

(16) 注5掲載書のイソップが養子に与えた教訓。

- (17) イソップ寓話集が翻訳され国字文語体の『伊曾保物語』が成立する中で、教訓に日本的な要素が附加されていることについては、拙稿『伊曾保物語』における教訓について(『佛教大学大学院紀要 文学研究科篇 第四〇号 〇二〇二年三月』を参照。
(18) 注17掲載の拙稿。

(はまだ ゆきこ 文学研究科国文学専攻博士後期課程満期退学)
(指導教員…黒田 彰 教授)

二〇二二年九月二十日受理